

平成24年度病害虫発生予察情報 特殊報第1号

平成24年8月30日
岩手県病害虫防除所

アリウム類べと病（仮称）の発生について

1. 発生状況

- (1) 平成24年5月下旬頃から、宮古市で栽培されている観賞用アリウム類で花茎や葉に病斑を形成し、枯死に至る症状が発生した(写真1,2)。3年ほど前に導入された新品目であり、ほ場規模は小さいものの、激発ほ場では全株に被害が見られた(写真3)。
- (2) 農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、*Peronospora destructor* によるべと病(仮称)と診断された。本病はアリウム類では初確認となる。

2. 病徴および診断

病徴はアリウム類と同属(ネギ属、*Allium*)のネギ(*A. fistulosum*)やタマネギ(*A. cepa*)のべと病に似る。花茎や葉身に暗紫色の分生子を生じ(写真1)、淡黄色から褐色の楕円形病斑を形成する(写真2)。病斑を形成した葉や花茎はその部分から折れやすくなり、枯死に至る(写真3)。分生子を顕微鏡下で観察すると、分生子柄は叉状に分岐し、その尖った先端に楕円形の分生子(約 $40 \times 20 \mu\text{m}$)を形成する(写真4)。絶対寄生菌であり、人工培地を用いた診断が困難なため、病徴観察と検鏡により診断する。

なお、本病の発生を確認した品種は‘ブルーパフェーム’(*A. caesium* と *A. caeruleum* の交雑種)であり、ギガンチウム(*A. giganteum*)など他の観賞用アリウム類における発生は確認していない。

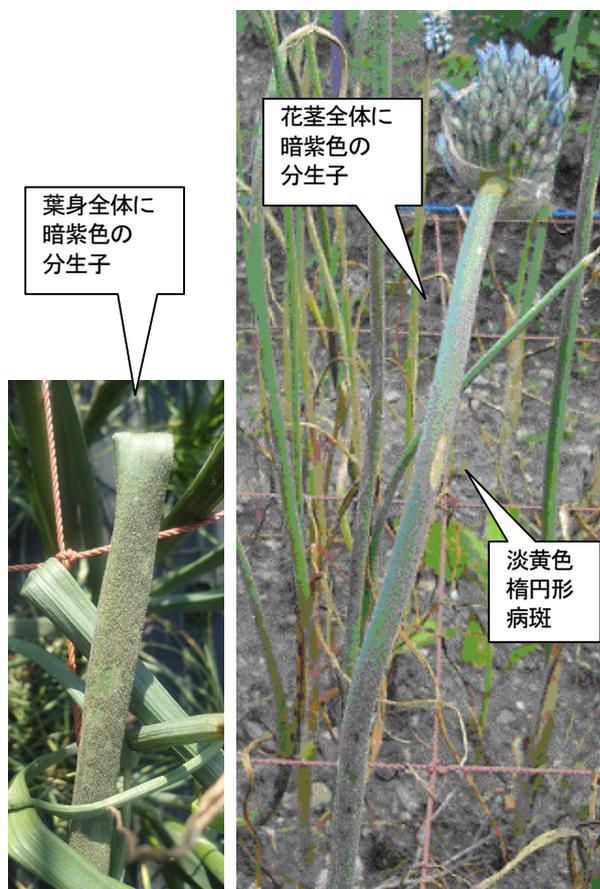


写真1 葉(左)と花茎葉(右)に生じた分生子



写真2 葉(左)と花茎(右)の楕円形病斑



写真3 激発ほ場

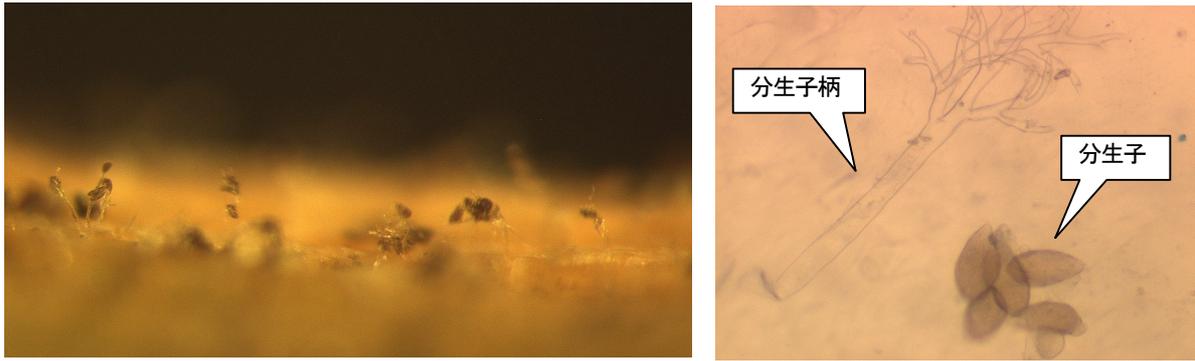


写真4 検鏡による分生子および分生子柄の様子

左：実体顕微鏡（分岐した分生子柄とその先端に着く楕円形の分生子）

右：光学顕微鏡（分岐した分生子柄から楕円形の分生子が脱落した様子）

3. 病原菌と伝染

- (1) 本病の病原菌 *Peronospora destructor* はネギ属のネギ、タマネギ、ワケギなどを侵し、べと病を発生させるが、ニラ、ラッキョウ、アサツキなどにはほとんど寄生しない。
- (2) アリウム類における伝染様式は明らかでないが、本病の発生時期(5月下旬)およびネギやタマネギのべと病の伝染様式から、前年秋の定植後に感染した株が11～12月あるいは3～4月に発病して全身感染株となり、それが伝染源となって二次感染株が発生し、蔓延していくものと考えられる。タマネギでは鱗茎に寄生した菌糸の状態では越夏しない。

4. 防除対策

現在、本病に登録のある薬剤はないので、以下の耕種的対策を行う。

- (1) 本病は被害が見え始めてから短期間で蔓延するので、耕種的対策による予防が重要である。
- (2) 発生ほ場では連作しない。また、発生ほ場由来の球根を使用しない。
- (3) 3～4月に全身感染株を見つけたら早期に抜き取り、ほ場外で適切に処分する(焼くか土に深く埋める)。近くでネギ、タマネギ、ワケギが栽培されている場合は、これらの全身感染株も同様に抜き取り処分する。
- (4) 被害残さも同様にほ場外で適切に処分する。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX (68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス <http://i-agri.net/agri/>

農薬使用の際には (1)使用基準の遵守 (2)飛散防止 (3)防除実績の記帳 を徹底しましょう